
ヤンデレスイッチ第一部

後藤維新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレスイッチ第一部

【Nコード】

N7485I

【作者名】

後藤維新

【あらすじ】

時は2410年日本の男は激減していた

そうそれは一つのロボットによって

人が作り出した最凶最悪の兵器通称ヤンデレ

Yesterday

Automic

Nucleus
Despair
Empress
Rule
Expect

それは元々一人のモテない男が作ったものだった

しかし核融合炉を積んだそれは暴走し最凶の破壊兵器と化した

見かけはただの美少女だが性格はヤンデレ

ヤンデレスイッチが入ると主人を殺すまで止まらない

だがスイッチが入らなければ可愛い彼女なのである

そしてヤンデレの姿は主人のために変わる

故にヤンデレに決まった形はない

第一話 恋は愛に変わり 愛は旋律と恐怖を与える 前編（前書き）

執筆は遅いですがどうぞ楽しんでください

第一話 恋は愛に変わり 愛は旋律と恐怖を与える 前編

第一話 恋は愛に変わり 愛は旋律と恐怖を与える 前編

この物語の始まりは登校前にさかのぼる

俺の名前は水嶋 彰

高校一年生さ

部活は剣道部

とりあえずレギュラーさ

特に不満もなく学校生活を楽しんでるよ
ただ一つの悩みを除いては…

「隙ありー!!」

右斜め後ろからの不意討ち

だが俺は重心を左にそらしかわす

「チキシヨウやったと思ったのに」

「まだまだだな」

こいつは山上 忍

別にこいつが悩みの種じゃない俺の悩みは…

上靴に履き換えるため靴箱を開けるとたくさんの手紙が崩れてくる

そう俺の悩みはなぜか女子に好かれてしまうことだ

他人から見れば羨ましいかもしれないが俺にとっては女難以外の何

物でもない

「相変わらずモテるねえ」

「嫌みか？」

俺は今は恋なんかしてる余裕無いんだよ。」

そう俺は死ぬ気で練習してレギュラーを勝ち取ったのだ。

今は恋などしてる余裕はない

そう思っていた。

だがそれは違った。

ただ恋する相手がいなかったただけだった

俺はこの後それを痛感する

第一話 恋は愛に変わり 愛は旋律と恐怖を与える 中編

さて、行くか」

俺は手紙を鞆にしまい

後で皆に返事を書く

そつでもしなきゃ書いてくれた人に悪いから

俺はそのまま歩こうとして一人の女子生徒にぶつかった

「あつ、ごめん大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

ぶつかった女子生徒はすごく可愛い子だった

(って何を考えているんだ俺は)

「立てる？」

俺は右手を差し出した

「あつ、はい」

彼女は手を握ったので立たせてやった

「すみません」

少女は申し訳なさそうに謝る

「見ない顔だが転校生？」
俺は少女に訊ねた

「はい、一年A組に転入する 早乙女 亜綺です」

「へえ、同じクラスか俺は水嶋 彰よろしくな」

「Yes My master」

彼女は小声でつぶやいた

「何でもありません

それより職員室はどこに？」

「ああ、その階段上れば目の前にあるから」

俺は丁寧に説明する

「ありがとうございます」

彼女は走り去っていった

俺は新しい学校生活に少しだけ期待した

第一話 恋は愛に変わり 愛は旋律と恐怖を与える 後編（前書き）

これで第一話は終わりになります

第一話 恋は愛に変わり 愛は旋律と恐怖を与える 後編

「転校生を紹介するぞ」

だいぶ老けた先生がホームルームで転校生を紹介する

「東京の聖白百合女学院からきました早乙女 亜綺です
よろしく」

亜綺は俺を見つけると微笑み手を降った

俺も手を降り返すと後ろの席の忍に首をチヨークスリーパーされた。

「お前は、いつの間にあんな美人と仲良くなったんだよ

言え

言わなきゃ殺すぞ」

俺は頭を後ろに傾け忍のアゴに後頭部で頭突きした

そんなことはいざ知らず担任は亜綺の席を探している

「早乙女の席はそうだな…」

「先生俺の隣空いてますよ!!!」

忍は元気よく告げる

そして亜綺は俺の方へ歩いてきた

「来た来た来たー」

忍はかなり騒いでいる

しかし亜綺は忍の隣に座らず俺の隣に座った。

「また彰狙いかよ〜」

忍はずっとグチっている。

「よろしくお願いしますね彰君」

亜綺は微笑み俺に挨拶した

「あ、ああ」

そして休み時間

「あ、あの早乙女さん
学校案内しましょうか？」

「ずりいぞ赤坂
抜け駆けはなしだ」

と亜綺を巡って波乱が起きた

そこで亜綺は…

「ありがとう、でも遠慮しておくわ、彰君頼んで良い？」

第一話 恋は愛に変わり 愛は旋律と恐怖を与える 後編（後書き）

次回予告

校舎案内を頼まれた水島 彰

彼に頼んだ少女の心理は…

次回 僕が今奪い去る

第二話 朝も夜も恋い焦がれて前編

「彰君 頼んでいい？」

突如俺に降られたが俺は話を聞いていなかった

「え？」

何を？」

「校内を案内してほしいんだけどダメかな？」

上目遣いで彼女は訊ねる

「構わないよ…」

俺でいいなら」

「ありがとう

じゃあ行きましょう」

彼女は俺の腕をつかみ教室を出る

教室からは妬みと嫉妬のこもった殺気が俺に刺さる

とりあえず俺はそれを無視して彼女に校内を案内していた

「ここが美術室であそこが科学室

でもここら辺は部活にでも入らない限り来ることは少ないよ」

「部活とかは入る気ないから」

「へえ」

俺は場所を変えて違う階を案内する

「でここは実習棟
移動教室の時は大抵ここら辺の部屋だから」

彼女は音楽室の前で立ち止まった

「音楽室を見てく？」

「ええ」

そして俺たちは音楽室に入った。

ピアノを目の前に彼女は引き始めた
曲はショパンのノクターン

彼女が曲を引き終わるまで俺は彼女に見とれていた

「…どうしたの？」

彼女は心配そうに俺を見つめる

「何でもないさ、それより一つ聞いていいか？」

「何？」

第二話 朝も夜も恋い焦がれて 後編

俺が亜綺に聞きたいことそれは…

「何故、俺に案内に選んだんだ？」

俺以外にもいただろ」

彼女は少し返事に迷いそして答えた

「一目惚れって信じる？」

彼女の予想が外な返答に俺は戸惑いそして答えた

「ああ。」

「私一目惚れだったの貴方に…」

いきなりの告白に俺はさらに戸惑いそして答えた

「俺もお前のことが好きだ

俺は今まで人を好きになつたことはなかった

だけど今はお前のことしか考えられねえ

俺と付き合ってくれ」

彼女は驚き少し戸惑いうれしそうに笑った

「はい、喜んで」

これが俺生まれて初めての告白だった

そして最後の…

第三話 夕暮れはまじり輝く色 前編（前書き）

第三話 夕暮れはもう違う色 前編

亜綺と付き合ってから一ヶ月が経った

俺は部活で先鋒だったのがこの一ヶ月で大将にまで上り詰めた

不意に先輩が話しかけてきた

「最近お前変わったな。」

「そうですねか？」

「ああ、少し前のお前の剣は自分を殺し相手を殺す剣

すなわち殺人剣だった

だが、今のお前の剣は

自分を活かし相手も倒す

いわば活きた剣

活人剣だ」

「そうですねか？」

俺はそんなつもりないですけど」

「いやこの一ヶ月でお前はかなり変わったよ

一ヶ月前までは笑わなかったが今はよく笑うようになった。」

「だったらそれは彼女のおかげだと思います」

「はっはっは

そうだな」

先輩は豪快に笑った

部活が終わり俺は学校近くの喫茶店に入った

「お待たせ」

俺は喫茶店で待たせている亜綺に話しかけた

第三話 夕暮れはもう違う色 後編

「お待たせ」

俺は喫茶店にいる亜綺に話しかけた

これはつきあい初めてから三日で作った二人だけのルール

俺が部活で遅くなる日は亜綺が喫茶店で時間をつぶし一緒に帰る

俺たちの家は近い(ってか隣)

なので登下校は一緒にしている

そしてうちには滅多に親がいないのでたまに飯をつくってくれ
他にも部活のない休日はデートしたりと俺たちは楽しんでいた

しかし…

それはある日壊れた

「彰君これ食べて」

昼休みにクラスメイトの橘 綾瀬から弁当を渡された

「いらん、亜綺が作ってくれるしな」

そう言うと綾瀬はキョトン顔で訊ねた

「聞いてない？」

早乙女さんに頼まれたんだけど」

「それは悪かった

わざわざありがとう」

俺は綾瀬から弁当を受け取り屋上へ行った

「何そのお弁当」

亜綺は俺の持っていた弁当箱をみて俺に聞いた

「何って綾瀬から渡されたんだけど

亜綺に頼まれたって言ってたけど」

第四話 スイッチON

俺は綾瀬から渡された弁当について亜綺に話した

「へえ、そうなんだ

事情はわかったよ

疑ってごめんね

おわびに今日うちに来て

夕飯ごちそうするからさ」

亜綺はそう謝った

「否わかってくれたなら良いよ

夕飯か期待させてもらうよ」

「うん美味しいのを作るね

さあ、昼食にしようよ」

そして俺たちは亜綺の作った弁当を食べた

綾瀬から渡された弁当は放課後に返した

そして放課後俺は亜綺と共に学校から家に向かった

「夕飯の材料買うからつきあって」

俺は亜綺と共にスーパー佐井屋迅で買い物をした

「ゴメンね荷物持ってもらって」

亜綺は重い買い物袋を持つ俺にすまなさそうに謝る
俺は笑って

構わないよと返した

そんな風に話してるうちに俺たちは家についた

亜綺が家の鍵を開け俺は中に入る

「そこら辺でくつろいでてね」

「いや手伝うよ」

俺は亜綺にそう言っていると亜綺は疲れてるんだから良いと言って俺を厨房に入れなかった。

「そうか…悪いな」

俺はしかたなくテレビをつけ見始めた

『ごめんなさい』

こういうときどんな顔すればいいか分からないの』

「」「ごちそうさま」

二人が食べ終わると亜綺は食器を片づけ始めた

「悪いな」

「良いよ、座ってて」

俺は手伝おうとしたが亜綺に止められテレビを見始めた
先ほどのアニメがやってるらしく見入ってしまった

『歌は良いね、歌はリリンの生み出した文化の極みだよ』

『君は？』

『ブッン』

急にテレビの映像が消えた
いや亜綺が消したのだ

「どうした？」

「大事なことを思い出したの」

どうしたのだろう、亜綺のようすがおかしい

「何？」

「私ね貴方のことが好きなの」

「何を今更

俺だってそつだよ」

「でも私やきもち妬きなんだ
だから死んで」

その言葉と同時にくる二つの斬撃

二本の包丁が俺に襲いかかる

『笑えばいいと思うよ』

昔のアニメだろうか再放送らしく画質が悪い

「出来たよ」

亜綺が夕飯の用意が出来たといつたので俺たちは食事を始めた
しかし俺は亜綺の微細な変化に気づかなかつた

最終話 それでも良いと思える恋だった

そばにあった竹刀で一本の包丁を止めた

「くっ!？」

だがもう一本の包丁が俺の左胸を狙う

「痛っ」

俺は左手を犠牲に二本目の包丁を止めた

「死にたくはないさ

まだな」

彼女は竹刀から包丁を抜き

「さよなら」

亜綺の包丁は鈍い音と共に俺あばらの間を抜いて内蔵を貫いた

「かはっ」

俺は血を吐き床が汚れる

「ごめんね

でもこうするしかないのよ」

薄れていく意識の中彼女は泣いているように見えた

翌日

カシャ、カシャ、カメラの音が室内に響く

「ガイシヤは制服にあつた学生賞からみて水嶋 彰
近くの高校の学生です」

「つたく、これが人のすることか？」

「確かに、目を背けたくなるような現場ですね」

現場には首が無くなり外見がミンチのようにバラバラにされている
死体が転がっている。

「これですつと一緒よ」

第一部完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7485i/>

ヤンデレスイッチ第一部

2010年10月13日12時10分発行